

## 13.08.15～20 涸沢～黒部周遊山行報告書(5日目・6日目)

M3 荒川 晶

### ⑦5日目(高天原温泉～温泉沢の頭⇄水晶岳～赤牛岳～奥黒部ヒュッテ)

この日は長丁場になることが予想されていたので、4時前に起床。支度をして、日の出の20分ほど前の4時50分頃、朝食前のひと時を過ごす小屋の宿泊客を尻目に高天原温泉を出発。行程中には水場は一切なしなので、水は4L装備した。15分ほど歩いて再び昨日の温泉を通過。名残惜しい気持ちもしたが、今日はそのまま、温泉沢を詰めるコースを歩く。今まであまり経験のない沢ルートであるが、昨日温泉に入る前に少し下見をしたところ、ペンキマークもあり問題なく歩けそうだったので、登ることにした。

しかし実際は思ったほど歩きやすくはなく、沢に入って15分ぐらい歩いたところで渡渉点を間違えて砂礫のザレ場を無理やり登ることになり足元を滑らせてしまう。幸いにも砂まみれになった以外、怪我はなかったが、こんなルートが続くなら引き返した方がいいかもしれないと一瞬思った。その後も岩と岩の間を飛び跳ねて渡る渡渉点や、本当にこれが正しいルートかと思間違えるようなブッシュの中を歩く箇所、また沢が中州を挟んで二手に分かれるように見える場所も何箇所もあり、途中で右俣に入るというルートを外してしまったのではないかと心配しながら歩く。

結構早朝から消耗してしまったので少々休憩を挟み、1時間少々歩いて漸く沢の分岐点に到着。右俣に誘導するようなペンキマークがあちこちにあり、注意していればまず迷うことはなさそうだった。そこからさらに15分ほど歩いて沢から尾根に取りつくロープに到着。ここも間違えて通り過ぎてしまったという記録を何件か見たが、その後コースが整備されたのか、注意して歩けばまず間違えるようなことはなさそうな場所であった。到着は06:35。高天原山荘のルート案内図には、「ロープ取り付けまで1時間」と書いてあったが余程慣れていないと難しいだろうなと実感。

ここで漸く沢ルートから解放されたかと安心して、このルートを今歩いているのも自分ひとりだけかと感慨深く休憩していると、すぐに下から4人組の中年グループが登って来てしまった。話すことには自分のルートから水晶岳往復を省いた形で奥黒部ヒュッテに抜けるようだ。

ロープに取りついて樹林帯をしばらく歩き、ハイマツの茂みを越えると、今度は今まで経験したことのないような尾根の物凄い急登、しかも足元がザレていて滑りやすいのなんの。荷物の重い自分がゆっくりゆっくり登っていると小屋泊装備の4人組にあっさりと追い抜かれてしまった。唯一の救いは今日も雲ひとつない快晴で、後ろを振り返れば薬師岳のたたずまいが素晴らしいこと。休憩する場所探しにも苦労しながら、少しずつ高度を稼いでゆく。先程の4人組は早くも温泉沢の頭まで到達してしまったようだ。途中で高天原へと直接下る尾根と合流すれば温泉沢の頭はもうすぐ。このあたりから次第にガレ場やちょっとしたゴーロ状の岩もあり、多少は歩きやすくなる。この辺りから中年夫婦と中年男性の単独行とすれ違う。中年夫婦には先程の4人組に着ていたジャケットから診療所の話をしたからか、「東大の学生さんが登ってくるって前の人たちが言ってたわよ～」とか言われる。これで万一遭難してもここまで足跡は辿ってもらえるなと思いながらにこやかに挨拶。中年男性にはルートの説明を簡単に。自分は、とてもではないがこのルートを下りたいとは思わないが、皆見かけによらず相当な経験者なのだろうなと自分を戒めていると、ようやく温泉沢の頭に到着。時刻は予想より少々遅れて08:50。

周囲360度、見渡す限り広がる大展望。遠くには檜穂高、燕、大天井から手前には野口五郎・烏帽子

の稜線が聳え、水晶・三俣蓮華・黒部五郎から雲ノ平・薬師、そしてこれから歩く赤牛岳の展望が素晴らしい。ここまで高天原温泉から 900m 以上の登りであったが、ルートの困難さもあってか今までにない深い充実感が残った。天気の良い日に登って来られて本当に良かった。



日の出前の高天原山荘を後にする。小屋の朝食は5時からなので、この時間の出発は私のみ。



温泉沢は脆いザレ・ガレの続くルート。始めは河原をペンキマーク頼りに歩く。



一番怖かったのがこの渡渉点。自分が濡れてもいいが、カメラだけは濡らしたくないので…



ここは右岸のブッシュを突き抜けるようにして歩く。増水時の通行は難しいだろう。



沢を右俣に折れる場所。左俣の岩には×印が書いており、注意していれば迷うことはない。

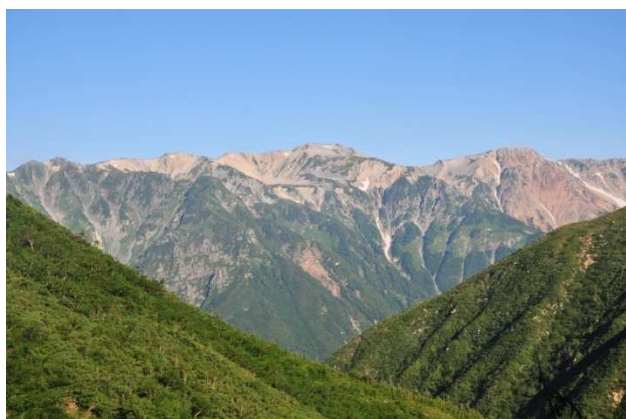


ロープ取り付け点も大きな岩が矢印でルートを示していた。



(上)始めはしばらく樹林帯の中を歩く。これまでとは全く違った雰囲気になる。

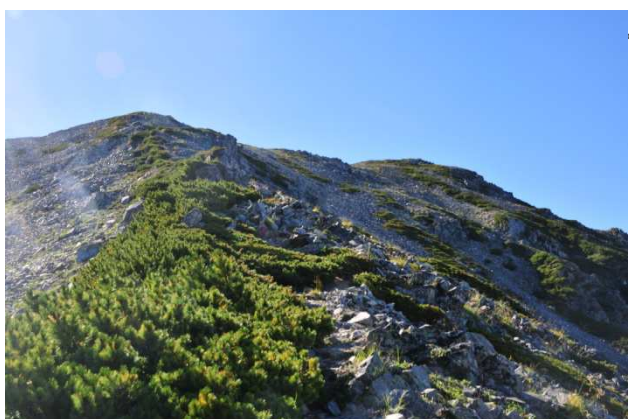
(左)ロープ取り付けはこちら。ここにも丹念にペンキマークが付けられている。



振り返れば薬師岳の展望が素晴らしい。



正面はザレた急登。見た目以上に険しい。



(上)高天原からの尾根に合流。一見歩きやすそうに見えるのだが…。左には北ノ俣岳が見える。

(左上)右下の丸っこい樹林帯の中から尾根を直登する。岩場でもないのに高度感すごかった。

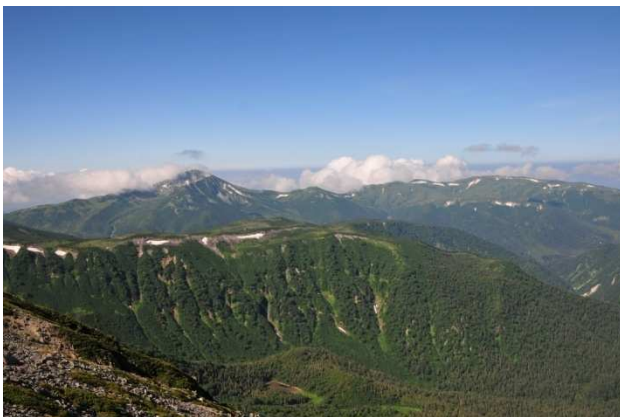
(左)合流点を過ぎるとガレた感じの登りとなる。温泉沢の頭まではもう一息。



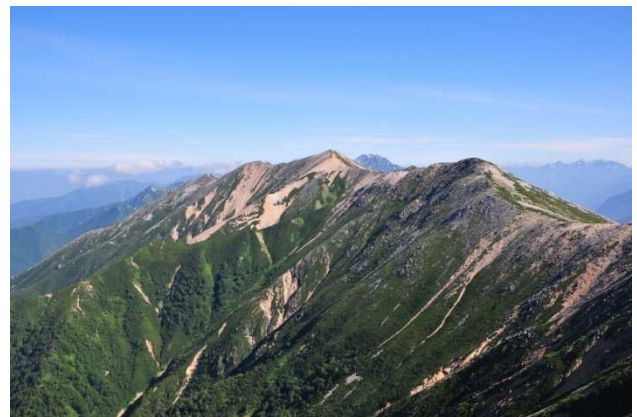
漸く辿りついた、温泉沢の頭。野口五郎岳がここで初めて見えた。



振り返って今まで歩いてきた尾根を振り返る。確かにすごい急登だった。



黒部五郎、北ノ俣岳を遠望しながら、手前に雲ノ平、足元には水晶池。



赤牛岳へと続く稜線。これから歩くロングコース。

いつまでも眺めていたいような素晴らしい景色だったが、この後の行程を考えると、水晶岳を往復するならば、急がなければならない。サブザックの支度をして急ぎ水晶岳へと歩く。途中稜線の左右に道がついておりルートに分かりづらい場所があったが、山頂手前はやや面倒な岩稜帯が広がっていたり、雪渓のすぐそばを歩くなど短い間に変化に富んだコースであった。この間にこれから温泉沢を下りて高天原温泉を楽しみ、雲ノ平まで登り返すという同世代の単独行の若者と出会った。これからのコースのことを話すと、「いいルートですね」と言ってくれて少し嬉しい。

二重山稜とされるピークはやはり水晶小屋寄りが本物のようで、そちらに看板も設置、人が集中していた。到着して見下ろしてみると、一昨日遭遇したクラブオーリズムの団体さんがまたも登ってくるようだったので早めに記念撮影をして山頂近くでのんびり。この辺りから見ると燕が横に長く、大天井岳と常念岳がほぼ同一方向に見えるのが意外であった。早め早めにと念じつつも、やはりこれだけ素晴らしい展望は捨てがたい。結局 20 分ほど滞在して、再び温泉沢の頭まで歩き始める。時間も時間なので、流石に同方向で歩く登山者はいないだろうと思っていると、何故か朝出会ったのとは別の、比較的軽装の中年 4 人組が赤牛岳目指して歩いていた。温泉沢の頭に戻り、再び重たいザックを担ぐ。次第に存在感を大きくしてゆく赤牛岳と向き合いながら歩く。山と高原地図に、「花崗岩の岩ゴロゴロ浮石注意」と書かれていたがまさしくその通りで、なだらかそうに見える稜線とは裏腹に、思いのほか面倒なゴロ

の岩が続いたり、ザレたルートを支元に気を配りながら歩かなければいけない箇所が続き、案外気を抜くことが出来ない。途中何人かの登山客とすれ違った。読売新道を登ってきた人もいることにはいるだろうが、案外水晶小屋や三俣山荘に前泊し、日帰りで赤牛岳を往復する人も多いようだ。途中小ピークを何度か登り返したりして、12:50、ようやく赤牛岳に到着した。ここで行動食とこの日の昼食用に取っておいたサバ缶を食べる。間もなくして先程の4人組が到着…、と思いきや1人遅れていて、3人がやってきた。いやいや好天とは言えペースの遅いメンバーを置いてきちゃダメだろうにと思いながら、記念写真をお互いに撮影。雰囲気からして読売新道を下りそうにないと思っていたらやはり水晶岳方面に戻り、水晶小屋に泊まるのだとか。どうやら行程が遅れているようで、遅れていた1人が到着すると、リーダー格の人物が残りのメンバーを急かすようにして、すぐに水晶岳方面に戻って行った。

ここから3時間半の行程、どうぞご無事にといいながら、いよいよ天涯孤独になった気分でも誰もいない赤牛岳の山頂からの展望をしばし楽しむ。ここまで来ると薬師岳が大きく聳え、3つあるというカール群もまた良く見ることが出来た。北方向は立山が随分近く見えるほか、その近くに今回の山行の最終目的地となる黒部ダムと黒部湖が間近に迫り、いよいよ終わりが近づいてきたのを実感。その向こうには南沢岳・針ノ木岳・赤沢岳などの山々があり、いつかはこの稜線を歩きたいなという思いを強くした。東方向には三ツ岳・烏帽子岳が東沢谷を挟んだ向かい側に、呼べば声が届きそうな距離である。

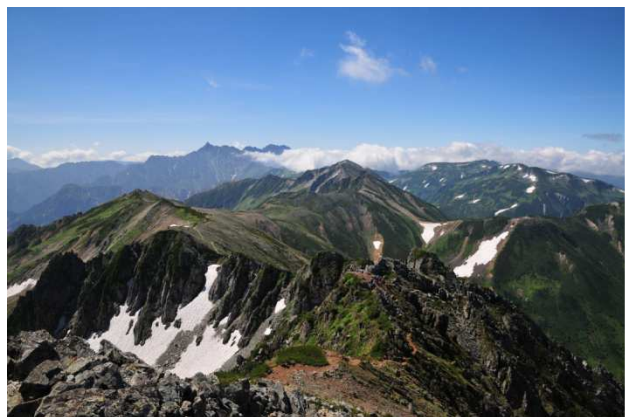
時刻ははやくも13時過ぎ、ここから奥黒部ヒュッテまではまだ標準5時間のコースタイム。奥黒部ヒュッテを目指すのであればどう考えても遅すぎる時間だが、日没に間に合わなくとも、装備は十全にあるのだから心配せずゆっくり行こうと自分に言い聞かせながら出発の支度をした。



温泉沢の頭付近から水晶岳。どっしりとした山容。左には槍と北鎌尾根が見える。



稜線は所々ガレ場も。水晶岳近くでは雪渓が残っている箇所も見られた。



(左)水晶岳山頂から北方展望。稜線伝いに、奥がワリモ岳・鷲羽岳、その左手遠方が槍穂高連峰、右側が三俣蓮華。

(右)  
山頂で記念に。





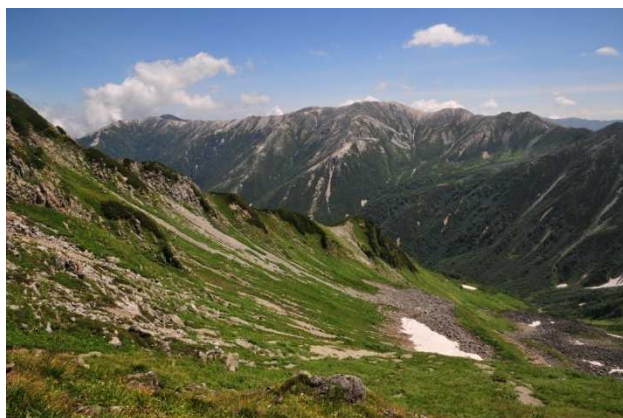
山頂の看板と赤牛岳・立山を合わせて。この後すぐこの一帯はクラブオーリズムご一行に占拠されました。



北面の展望。烏帽子岳・針ノ木岳が特徴的。



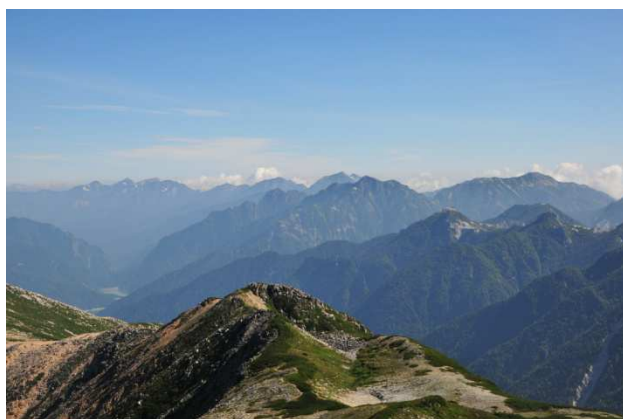
眼下には高天原山荘が見える。今朝はここから歩いてきたのだなと思うと感慨もひとしお。



東沢方面を見下ろすと、野口五郎岳が大きく見える。



再び温泉沢の頭に。赤牛岳の山容はやはり独特。



こちらは始めに温泉沢の頭に到着したときのもの。一番遠くの稜線は、左から白馬岳・白馬槍・唐松・五竜・鹿島槍。その手前に針ノ木岳・蓮華岳。さらに近くに南沢岳・不動岳・烏帽子岳など。



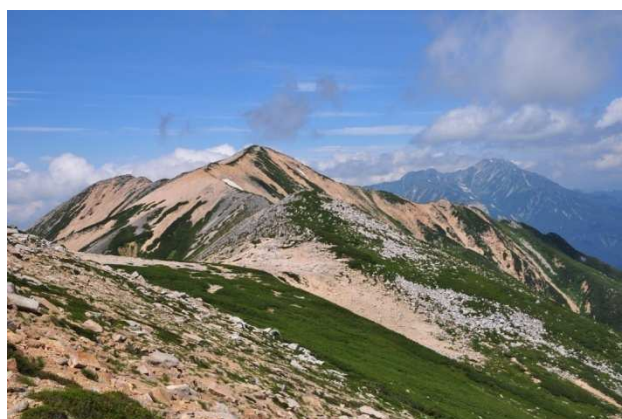
稜線のルートは思いのほか歩きにくい。たまたま同じ時間帯になった4人組が前を歩く。



温泉沢の頭を出て1時間半、水晶岳は大分遠くなった。



このような花崗岩のゴロゴロした所を歩く箇所も何箇所もあり、結構苦労した。



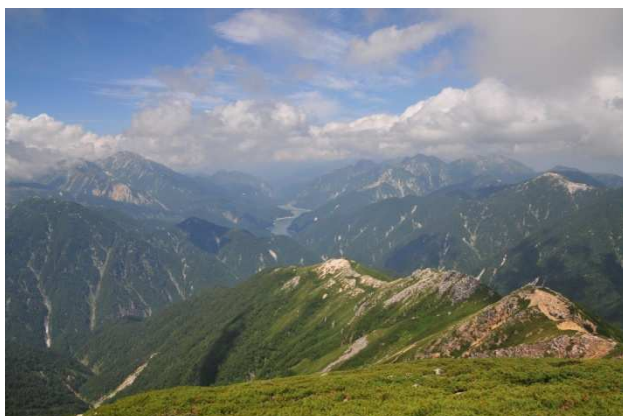
目指す赤牛岳はもうすぐ。立山連峰が向かいに見える。



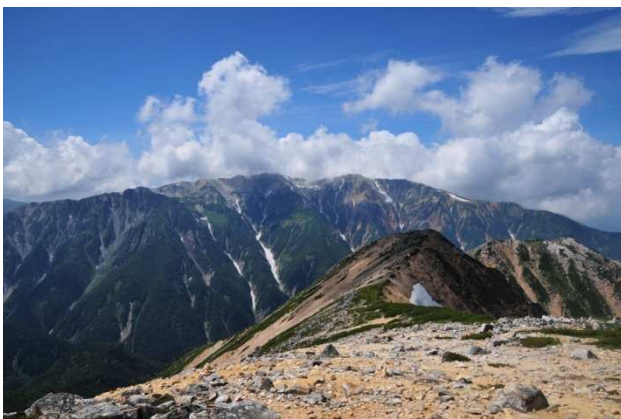
(左上)ようやく到着した赤牛岳山頂で。人に出会うとは思っておらず、記念写真も予定外のこと。

(左)山頂を少し離れた場所が北面の展望は最も良い。黒部湖を挟んで、立山と針ノ木岳・蓮華岳の眺めが素晴らしい。

(上)北面の展望。水晶岳に向かい黒々とした稜線が続く。ここでも槍ヶ岳を眺めることが出来た。



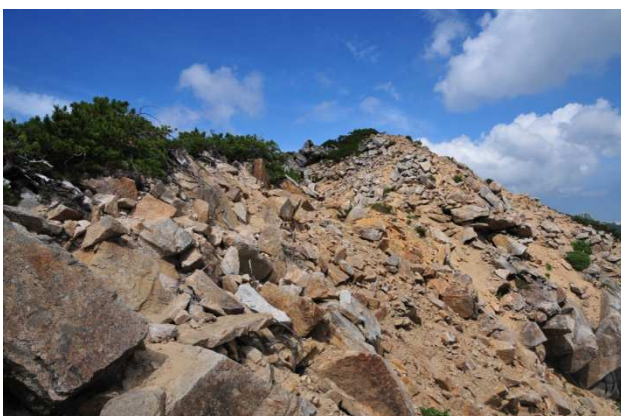
さて、支度を整えて 13:20、ここから読売新道の下りに入る。ここから奥黒部ヒュッテまでは、登山道の長さを考慮してか、奥黒部ヒュッテを 0/8、赤牛岳山頂を 8/8 としてルート上の適当な地点に 1/8 から 7/8 までの番号を振っている。始めの 1 時間で 6/8 まで。この区間は先程と同じようなガレ場、ゴロゴロとした岩場も続き通過には慎重を要する。おまけにこんな時間となってしまった為に日差しが暑い。熱中症にならないように、かつ今晚ビバークしなければいけなくなった時に備えて無くならないように水を調整しながら飲む。山頂とこの付近にはテントを 2.3 張り張れそうなスペースがあった。ここを過ぎるとすぐに 5/8、4/8 の標識があり、次第に樹林帯の中に入っていく。この辺りから一転、鬱蒼とした樹林帯の中のルートをも木の根を跨ぎ、いくつかの鎖場を抜ける。ただ先程の様な足元の悪さはないのでペースを上げてサクサクと歩く。山と高原地図で間違いを指摘されていた 2/8 の標識は 1882m ピーク付近にあって、地図上 2/8 と書かれている付近には 3/8 の標識があった。先程まで見下ろすような位置にあった烏帽子岳が、今や遙か高く見えていて、随分下ってきたのだなと実感する。1/8 の標識に着いたのが、日も大方傾いてきた 17:00 頃。この日は午後から周囲の山域では雲が出始めてきたが、不思議とこの一帯だけ日没まで晴れていた。幸運に感謝しつつ、この時間なら明るいうちに奥黒部ヒュッテまで行けるなと一安心。さらに小一時間歩いて 17:50 頃、ようやく奥黒部ヒュッテに到着。ここでも朝出会った 4 人グループが私のことを吹聴していたらしく、小屋番のおじさんが漸く来たかという顔で迎えてくれた。そういえば朝出会った時に水晶岳を往復する予定であることを告げるのを忘れていた、うっかりしたものだったと少々反省。テントの受付を済ませると、おじさんが後でお風呂を借りに来いと言う。宿泊者限定のはずだがいいのかしらと思いながらも有難く使わせていただく。早朝から 13 時間近く歩いてきた身には、この好意は心底有難かった。この日の宿泊者は、小屋にはお馴染みの 4 人組と、三俣山荘から歩いてきたというやはり 60 代に見える男性、テント場は私の他には、明日三俣山荘まで歩くという 1 人だけで、広々と使うことが出来た。風呂上りにビールを 1 本購入し、飲みながら夕食。食べ終わると殆ど同時に就寝した。

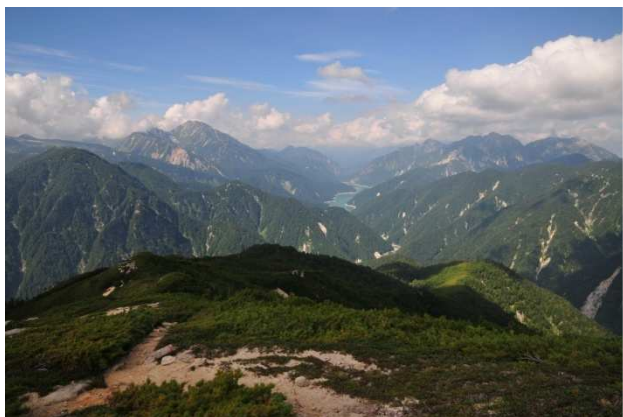


(左上)赤牛岳山頂から薬師岳。3つのカールの眺めが素晴らしい。

(上)しばらくは周囲の山々を望みながら稜線を歩く。しかし足元は悪い。

(左)ガレ場、ザレ場が続く、こういった箇所も何箇所もあり、重い荷物を背負った身には辛い。

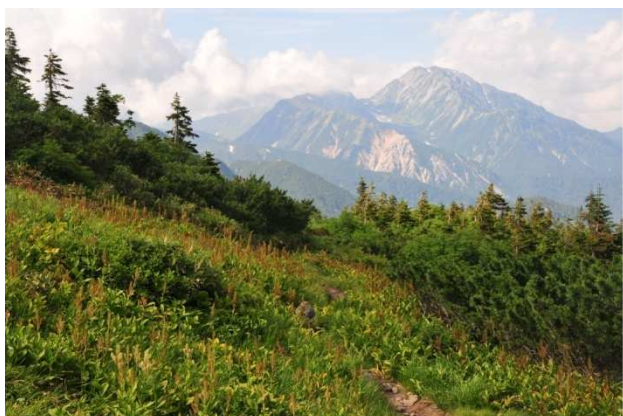




6/8 の標識付近より。立山・針ノ木岳が近くなった。ガレ場はこの付近で終了、樹林帯に入る。



振り返れば赤牛岳が高く聳える。登りでこのルートを使うと、この風景にどんな感慨を抱くのだろうか。



樹林帯に入る。立山を遠景にして1枚。



5/8 の標識の地点から。



(左)鬱蒼とした樹林帯の中を下ってゆく。  
(上)木の根を乗り越える箇所も幾つか。尾根は結構切り立っていた。



深い森の中を歩く。時刻は夕方 5 時を過ぎた。



谷間から漸く黒部の流れを見ることが出来た。



道中所々で見かけたブルーシート。やむを得ずビバークを強いられた登山者用ではないかと思われた。



奥黒部ヒュッテに向けて、最後の急な下り。沢音が大きく聞こえてきた。



ようやく奥黒部ヒュッテに到着した。この日は登山客だけの宿泊だったが、一般登山客の他、上の廊下の遡行、またイワナ釣りのベースキャンプとなる重要な拠点のようだ。



広々としたテント場は私ともう 1 人だけ。悠々と時間を過ごすことが出来た。

## ⑧6 日目(奥黒部ヒュッテ～平の渡～黒部ダム)

今回の山行も早くも最終日。今日は黒部川沿いにひたすら道を下るだけなので、テントの中で久々に熟睡。平の渡の出発時刻は 06:20・10:20・12:20・・・となっており、06:00 の便に乗るにはまだ暗いうちから出発しなければいけなくなるので、10:20 の便を選択。平の渡までの時間は 2 時間 30 分ほどなので、余裕を見て 07:00 出発の予定とし、05:30 にゆっくりと起床。すでに三俣を目指す方は出発された後だったので、今朝はテント場は自分一人だけ。朝食を食べていると、小屋泊まりの方々一行が 6 時過ぎに出発していった。テントなどもゆっくりと片付けて小屋の人に挨拶をしてから 07:15 頃出発。

始めに東沢を渡り、この後は黒部川沿いにつけられた登山道を歩く。地図上標高差は殆どないので歩きやすそうに見えるが、実際は黒部川に流れ込む小さな沢をいくつも渡渉するようなルートを取るのも、木でできた梯子を何度も登っては降りを繰り返すことになる。事前に調べておいたので予想したとおりだなあと思ったが、知らずに来てしまうと随分苦勞してしまうことだろう。

左手に眺める黒部川はどうどうという音を立てて流れてゆく。黒部五郎岳や三俣蓮華付近の穏やかな様相とは随分違うように思えてならない。これもやがて、流れの音が小さくなったと思えばいつの間に黒部湖に変わっていた。ここまであのダムが水を堰き止めているのかと考えると不思議な気分である。

そこからしばらく歩くと、遠くに休んでいる人がいる。06:00 の渡船で来た人だろうかと考えていると何のことはなく、昨晚小屋に泊まられていた方々一行であった。渡場に早く着き過ぎたのと、天気がやや崩れがちであるので登山ルートまで戻って休憩していたらしい。

しばらく休憩したり談笑したりしていると、やがて乗船時刻が近付いてきた。が、一行に動く気配が感じられない。少し不安に感じていると、やがて対岸から鈍いエンジン音の唸りが聞こえてきた。そろそろ動き始めたなと思って眺めていると、平ノ小屋付近から静かに渡船が姿を現した。もともと大きいものではないと思っていたが、5 人も乗ればいっぱいになってしまうような本当に小さな船だった。

釣り装備を備えた人が 1 名下山して、居合わせたグループの一人が、「まるで難民船を待っているような気分だ」と形容するほどのひなびた乗船場から船に乗り、間もなく船は出発。出発すると近くにもう一つ乗船場が見えた。昔はここが乗り場だったようだが、大雨か何かで崩壊してしまい、現在の仮設のような乗船場が利用されているようだ。針ノ木谷の景観を眺め、乗船名簿に記帳していると間もなく船は平ノ小屋の渡し場に到着した。全員が下船すると操縦していた平ノ小屋の管理人の方も船を離れて小屋に戻るようだった。奇しくもこの時丁度黒部ダムからやってくる遊覧船が後ろで U ターンしていった。管理人の方に少し話を振ってみると、一般の観光客がここまで来ないようにとか、遊覧船の下船場にするには環境が整っていないとかいう理由でここでは下船出来ないらしい。あれに乗れば 30 分も掛からずに黒部ダムに行けるのと思うと何とも残念である。残りの乗客は、すぐに黒部ダム目指して歩いて行ってしまったようだが、折角なので平ノ小屋に立ち寄ってしばし休憩することにした。



(左)

歩き始めてすぐに東沢の流れを渡る。丸太を束ねて結んだだけの極めて原始的な橋。大雨が降ったりして流されても自然を破壊しないようにとの配慮なのだろうか。



崩落地をトラバースするように、やはり木製の梯子がいくつも繋がって掛けられている。



地形も険しく、かなりの高度感のある場所が何箇所もあり、ルートの掛け替え跡も多かった。



時折木々の合間から黒部川の流れを見る。ダム湖が近いからか中州が多くみられる。



やがて川は流れを止めて、静かなダム湖へと注ぐ。この対岸が、今日の目的地の黒部ダムになる。



(左上)崩落した梯子もそのままに、新たな梯子が掛けられている。近くにはもう次の梯子のため(?)の材木が準備されている。

(上)平ノ渡の渡渉点のあるところ。注意書きの看板があるが既にぼろぼろになっている。

(左)今回は先行者がいたので探すまでもなかったが、渡船場に降りる木製の梯子が整備されている。





そして、ダム水位が変動するため、降りた先はそのまま湖へと下って行く。



定刻を少し過ぎた頃に、対岸からエンジン音が聞こえ、しばらくして渡船が姿を現した。



そして、乗船。ステップもしっかりしたものがないから上手くバランスを取って飛び乗る。



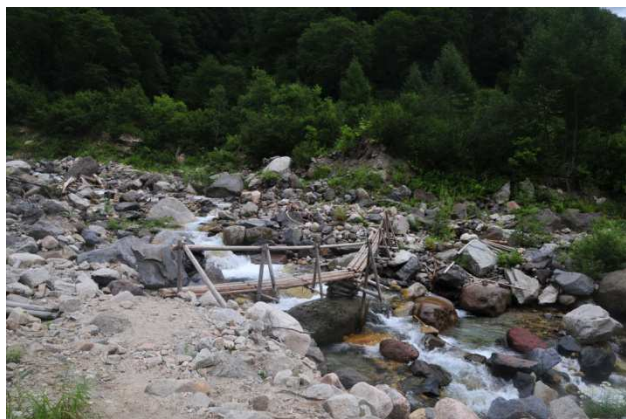
しばらくすると、以前の渡船場が見えた。コンクリート製だが、下部は崩落して使えない。



(左)下船した時丁度、ダムからの遊覧船が近くでUターンして戻って行った。ちなみに渡船は黒部ダム建設により生じた登山者の不便を解消するために関西電力が運航しているので、乗船は無料。  
(上)平の小屋。ログハウス調で静かなたたずまい。筑波大の学生4人が昨晚ここに泊まり、朝の便で針ノ木峠目指して出発したようだ。

20 分ほど休憩して黒部ダムに向けて出発。今度は右岸の樹林帯の中を歩く。ダムまでの間に、中の谷・御山谷と 2 つの大きな沢を渡る。いずれもかなり上流まで登り返して渡るので、1 時間近く歩いて、ようやく先程見えていた対岸に出ると言った塩梅で、時間があるとはいえ、随分ともどかしい。しかも、正午を過ぎたところからいよいよ雨が降り出してきた。左岸を歩いていた時のような大きなアップダウンはないが、展望のないブナの樹林帯が続き、自分が今どの辺りを歩いているのか、中々検討がつかずもどかしい。3 時間ほど歩いて漸く対岸にロッジくろよんが見えた。しかしここから御山谷を登り返すのでさらに小一時間かかる。雨のせいで渡渉が困難になっていないか少し心配であったが、特に問題はなさそうので安心する。14:55 にロッジくろよんに到着。ここでなくなりかけていたカメラのバッテリーを少々充電して出発。ここからはもうきちんと舗装された遊歩道。20 分ほど歩いて黒部ダムに到着した。

涸沢を出発してから 6 日間。ここまでの長い道のりを自分の足で歩いてきたのだなという静かな感慨が充足感となって心を満たす。天気が天気だったからか、思ったほど観光客は多くなかったのも今の自分には居心地が良い。在京責任者の岡本さんに一報入れたのち、しばしダムを観光してから帰路につくことにした。



中の谷の渡渉点。登り返すのにここまで 40 分ほど掛かってしまった。



ブナなどの樹林帯の中を歩く。この後しばらくして、雨が降り始めた。



(左上)雨がひと段落した頃に御山谷を渡る。  
(上)ブルーの屋根が落ち着いた雰囲気を出しているロッジくろよん。日帰り入浴も出来るそうだ。  
(左)遊歩道を歩いて 20 分ほど、黒部ダムに到着。居合わせた方に写真を撮影してもらった。(完)

